

# 本校における、これまでの研究と、 これからの研究について考える

## はじめに

今、21世紀に入り、私たちを取り巻く社会は大きく転換を図ろうとしている。そして、特別な教育的ニーズや障害児を取り巻く環境なども急速に変化している。こうした変化に適切に対応するため、盲・聾・養護学校の学習指導要領は平成11年3月に改訂されたところである。学習指導要領では、完全週五日制の下で、児童生徒に、自ら学び自ら考える力、豊かな人間性、たくましく生きるための健康や体力など、「生きる力」を育成することをねらいとし、児童生徒の障害の重度重複化や社会の変化を踏まえ、一人ひとりの障害の状態等に応じたきめ細かな指導を一層充実することなどを基本方針としている。

そして、障害の重度重複化や社会の変化に対応して、指導の一層の充実を図るため盲・聾・養護学校では、個別の指導計画、自立活動、総合的な学習の時間の実施や、地域における体験活動、交流活動の充実などについて、地域や児童生徒等の実態に応じた創意工夫した取り組みが求められている。

ところで、私たちは、校内の共同研究として実践研究を行い、その成果を教育計画や実践にフィードバックしながら教育課程の改善をすすめてきた。そして、今、学習指導要領が改訂され、21世紀の特殊教育のあり方が答申された時期をとらえ、基礎基本となる教育内容を見直し、指導形態等の改善の手がかりや方向性を探る、というサブテーマのもとアセスメント機能をもった内容表の作成に取り組んだ。

この研究を、今後、特色ある教育課程の創造に発展させていくために、そして、新たな発想により、特色ある学校を創造していくために、原点に立ち返って、研究のあゆみや、教育課程等の特色を、概観してみたい。

## 1 本校の研究のあゆみ

### (1) 研究テーマのあゆみ

昭和47年	「一人ひとりの力を伸ばすには養護・訓練をどのように計画し、指導したらよいか」	研究紀要第1集
昭和49年	「一人ひとりの力を伸ばすには養護・訓練をどのように計画し、指導したらよいか」	研究紀要第2集
昭和53年	「意欲的な学習を目指した精神薄弱児の指導は、どうあればよいか」 ～教育課程の改訂を目指して欲求の発達を探る～	研究紀要第3集
昭和54年	「生活力を伸ばすための合宿単元学習はどのように計画し、指導したらよいか」	研究紀要第4集
昭和56年	「教育課程の編成」～教育課程編成の手順をさぐる～	研究紀要第5集
昭和58年	「指導法の研究」～よりよい授業の創造をめざして～	研究紀要第6集
昭和60年	「教育課程の見直しの方法をさぐる」～「数と計算」の学習をとおして～	研究紀要第7集
昭和62年	「一人ひとりの子どもを見つめた実践と評価」	研究紀要第8集
平成元年	「社会生活を豊かにするコミュニケーションの指導 その1」	研究紀要第9集
平成3年	「社会生活を豊かにするコミュニケーションの指導 その2」	研究紀要第10集
平成5年	「“自らが生活を充実させようとする”教育を求めて」	研究紀要第11集
平成7年	「自立を支える指導法の研究」 ～自ら考えて行動する子どもを育てる授業のあり方を探る～	研究紀要第12集
平成9年	「子どもの内面に焦点を当てた評価のあり方と授業改善」 一人ひとりが主体的に取り組める授業をめざして～ その1：診断的評価から目標設定を考える	研究紀要第13集
平成11年	「子どもの内面に焦点を当てた評価のあり方と授業改善」 一人ひとりが主体的に取り組める授業をめざして～ その2：形成的評価から授業改善の方法を考える	研究紀要第14集
平成13年	「教育課程の再編成」	

## (2) 主な研究内容のあゆみ

本校では昭和56年に教育課程を編成した。その後昭和60年に教育課程の見直しの方法をさぐる研究に取り組んだ。さらに、それ以後、社会の動向や障害児教育の理念の変化などを先見的にキャッチしようと努め、次のようなキーワードを含む研究に取り組んできた。そのキーワードとは主に次のようなものである。

“一人ひとりの子どもを見つめる” “社会生活を豊かにする” “自らが生活を充実させようとする” “自立を支える” “自ら考えて行動する” “子どもの内面に焦点をあてる” “主体的に取り組む” “診断的評価” “目標設定” “形成的評価” “授業改善” など。

### ○ 昭和62年度～昭和63年度

「一人ひとりの子どもを見つめた実践と評価」の研究にとり組み、改めて“一人ひとりの子どもを見つめる”ことの必要性を説くようになる。

### ○ 平成元年度～平成3年度

「社会生活を豊かにするコミュニケーションの指導 その1, その2」の継続研究を行った。コミュニケーション指導内容の指導の順序と範囲を示した「コミュニケーション指導内容表」の作成と、その指導内容の基本的指導方法を示した「コミュニケーション指導プログラム」の作成をし、実践事例研究を行った。

コミュニケーションの研究では、気持ちの通じ合いの大切さや、子どもの意図を読みとることの大切さを知ることができた。また、子どもの意識の流れに沿った授業の展開を考えること、子どもと教師との意図の交流や調整を図りながら授業を展開することの大切さにも気づくことができた。この時期は子どもの気持ちや意識等の内面を重要視する指導のあり方へと大きく転換した時期でもある。

### ○ 平成3年度～平成5年度

○ 「QOL」「ノーマライゼーション」「自立」などをキーワードとし、“自らが生活を充実させようとする”や“自ら考えて行動する”など、子どもの自立を願って、子どもに主体性を求める研究を行った。

### ○ 平成5年度～平成7年度

本研究では、能力論的な視点だけではなく、自分の意志や意欲・自主性といった観点から自立をとらえ、自分で考えて行動する子供を育てるための指導法について研究した。指導仮説を授業実践によって検証しながら、①授業の組み立て方、②効果的な活動のさせ方や手だて・教師の働きかけなどを明らかにする研究にとり組んだ。

### ○ 平成9年度～平成11年度

“子どもの内面に焦点を当てた評価のあり方”の研究に取り組み、知識や技能面の評価と同様、情意面、態度面の評価の重要性を説き、そのような視点から、評価のあり方を求める研究に取り組んだ。また、このころは、診断的評価や形成的評価を授業にフィードバックすることをとおして、一人ひとりが主体的に取り組める授業をめざし、授業改善を図ろうとした時期でもある。

### ○ 平成11年度～平成13年度

教育課程の再編成の研究に取り組み、基礎基本となる中核的内容を求め“アセスメント機能をもった内容表試案作成”の研究に取り組んだ。

このように、本校は、その時代のニーズに応じて適時性のあるテーマによる実践研究を手がけ、一人ひとりの子どもの内面や発達に迫り、授業改善の研究を重ね、その時々成果を地域へ発信してきた。

## 2 本校の教育課程の特色

教育課程の編成に当たっては、学校教育法並びに国立学校設置法等の関係法令及び学習指導要領の示すところに従い、かつ、長崎大学教育学部附属の学校である使命も考慮に入れ、さらに特色あるものにするために創意工夫をしている。

### (1) 子ども観について

#### ① 子どもたちは、発達し続ける存在である

子どもは、知的にも身体的にも情緒的にも変化していく。この変化の源に欲求があるととらえる。

子どもたち自身、変化したいという欲求をもっているし、より高い次元と思われる欲求へと変化させていくことが教育であろう。

私たちは、この欲求の変化を発達ととらえ、すべての子どもたちは発達する可能性をもっているととらえている。

## ② 子どもたちは、一人ひとりちがう存在である

子どもたちはそれぞれに特別な教育的ニーズをもっている。障害の種類、程度のちがいと共に一人ひとりに特性がある。一人ひとりに応じた適切な教育を行い、一人ひとりの長所やもっている力を最大限に伸ばし、社会自立や社会参加をするための力を培っていく。

## (2) 内容について

### ① 小学部・中学部・高等部の一貫した教育課程

小学部・中学部・高等部の12カ年の一貫教育をとおして、一人ひとりの個性を尊重しながら社会参加・社会自立をめざす。そのために、小学部では「意欲づくり」、中学部では「基盤づくり」高等部では「適応づくり」を教育課程の柱として位置付け、これを一貫教育の理念として、教育課程を編成している。

### ② 経験による教育の重視

子どもたちは実際の行動を離れて思考したり、学習したことを他の場面で応用したりするのが困難である。したがって、生活そのものを学んだり、できるだけ具体的な生活経験をとおして学習するよりにしている。すなわち生活主義及び経験主義による教育を基本にして教育課程を編成している。

### ③ 教育課程の二重構造上の特色

知的発達の遅れに伴う心理的特性や学習上の特性に応じるため、教育課程上の工夫をしている。

本校では、教育目標の具体化としてとらえられる教育内容を分野ごとに組織しているところに特徴がある。さらに、その内容を、学習指導要領で示す教科領域等と関連させ、知的障害児が取り組みやすいよう組織化し、再編成している。これを指導形態とよび、その指導形態ごとに、指導内容も再編成している。このようにして教育課程を構造化したものを、教育課程の二重構造とよんでいる。本校では子どもたちの発達を願った特色ある教育目標を目指して、教育課程を編成している。

## (3) 方法について

### ① 調和的発達を意図した教育課程

発達段階や特性等を十分考慮し、なおかつ、豊かな人間性や社会性を育成するため、そして、人間として調和のとれた発達を図るという観点から、特色ある指導形態を設定し、教育課程を編成している。

### ② 集団のなかで、個に応じた指導を充実させる教育課程

子どもたちはお互いの関わり合いのなかで欲求を変化させ、発達していく。集団のなかで個の意識を刺激し、個の長所を集団にフィードバックして集団の意識を高めながら、集団づくりを行っていく。仲間に学び、仲間に教え、仲間に励まされ、仲間を助けて、仲間と共に育っていくことから、集団による教育を中心に据え、しかも、障害の状態、能力、特性、興味・関心や性格などに着目して個に応じた指導を充実させるような教育課程を編成している。

## 3 本校の指導方法の特色

### (1) 生きる力が身に付くよう、体験的な学習を大切にする。

- 生活そのもの（くらし、たのしみ、しごと、けんこう等）を学習する。
- 具体的な操作や生活経験をとおして学習する。

### (2) 形成的評価を大切に授業を仕組む。

- 授業の中で、評価を繰り返し行い、それを子どもたちにフィードバックし、一人ひとりがかかる授業を目指す。
- 形成的評価は、教師自身の評価でもある。子どもからの発信を謙虚に受け止め、子どもに学ぶ姿勢をもって、授業にフィードバックする。

### (3) 子どもたちの内面を読み取る感性を発揮して授業をする。

- 内面を読み取ったうえで、子どもと教師との意図の調整を図った授業を展開する。

- 子どもを中心に据えた指導であり、教師の授業への意図を、きちんと子どもに伝える授業をする。

**(4) それぞれの発達段階に応じた、自己理解、自己選択、自己決定の学習を重視する。**

- 社会自立、社会参加のためには、自分を知って、周りの人たちとの関係をつくることが大切である。
- 日常的に、自己選択、自己決定の経験を適切に仕組み、習慣化を図ることが大切である。その定着が、子どもたちの豊かな生活に通じるものである。

**(5) ティームティーチングにより、一人ひとりの教育的ニーズに応じた指導をしている。**

- 学級は、担任の主体性と副担任の自発性によるティームティーチングによって、ダイナミックに機能する
- 授業は主担当がリーダーとなり、主体的に、しかも、責任をもって行う。サブは、主担当の意をくみ取った動きを臨機応変に行う。このような、ティームティーチングの技量が、子どもの指導にフィードバックされている。これは、個別の課題に基づく個別の指導計画が、全職員で共通理解されているという背景があるからである。一人ひとりの子どもの特別なニーズを、全職員が理解して、学校教育活動全体のなかで、全員で子どもを育てるという、全員によるティームティーチングも有効に機能している。

## 4 今後の取り組みの課題

研究的視点から、本校が取り組むべき課題を考えてみたい。

**(1) 第三者にも分かりやすい研究を追求する。**

私たちが、研究によって培った専門性や、実践の積み重ねによって身に付けた力量を、保護者や地域の学校や多くの人々に活用してもらいたい。個人の力量の高まりにとどめておくのではなく、また、公開研究発表会や研究紀要だけでなく、いろいろなスタイルで研究情報を提供できるよう努力をしたい。地域の特殊教育のセンター的役割を果たす方法を、さらに開拓するとともに、研究をスリム化するなどして研究内容をわかりやすくする事も必要である。

**(2) 医療・福祉・労働等との連携による研究**

教育は、医療・福祉・労働等との連携を常態化させ、子どもを多面的に理解し、そのニーズを見極め対応したいものである。学校は、子どもの育ちをトータルで診断し、個々の可能性を十分に引き出すため、教育の力だけでは不十分な分野に気づき、あるいは、教師の特性をさらに発展させるためにも、学校外に、研究のパートナーを求めたい。これからは、開かれた学校であるためにも、教師一人ひとりが、教育に必要な様々な資源を求めて、ネットワークを広げていきたい。

**(3) 大学との連携による専門性の一層の向上**

地域への貢献や地域のセンター的役割を果たすためには、附属だけの単独の力より大学との研究の協力をもってする方がはるかに地域への貢献度は高い。附属は大学の知見を活用し、大学は附属の実践から研究を深められるとよい。今は単独の知恵の時代ではなく知恵の複合化の時代である。ネットワークを拡大していくことにより、児童生徒一人ひとりのニーズがより明確になり専門的対応を一層充実させるようにしたい。

**(4) 保護者との研究のかかわり**

これまで、本校では、保護者のニーズを知り、それを指導や教育に生かすために、担任や学校は、様々な形で努力をしてきた。しかし、保護者から得られた、子どもの変容や学級・学校への願い、発達段階に応じた育て方、進路や卒業後のことなどの情報が、客観的資料として連続したものがない。これからは、保護者の子育ての考え方、基本的な生活習慣の定着のさせ方など、保護者の子育ての専門性、卒業生からの発信などをもっと研究に取り込み、個人別の客観的資料を整えることで、一貫性のある指導の充実を図りたい。